



アレグリア

Alegrias

デビット・ゾペティ

David Zoppetti

アレグリア

Alegrias

デビット・ゾペティ

David Zoppetti

江苏工业学院图书馆

藏书章

集英社

アレグリア Alegrias

2000年6月10日 第1刷発行

著者 デビット・ゾペティ

発行者 小島民雄

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10 〒101-8050

電話 03-3230-6100(編集部) 03-3230-6393(販売部) 03-3230-6080(制作部)

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大日本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

©2000 David Zoppetti, Printed in Japan ISBN4-08-774473-6 C0093

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複製複製することは法律で認められた場合を除き著作権の侵害となります。

ア
レ
グ
リ
ア

Salida——踊り王

バレリーナの岸村陽子が古い銭湯を改造した僕のアトリエを訪ねてきたのは、一月上旬の昼過ぎだった。

アトリエの裏を、緑色の二面編成の世田谷線が走っている。六、七分間隔で、トコトコ、トコトコという音に続き、踏み切りの警報器がカーンカーンカーンと軽快に鳴り、辺りはまたすぐ深い静寂に包まれる。その日の朝、一本の思いがけない電話がかかってきた。僕はキヤンバスの表面を筆の穂で叩いたり、指先でグアッシュを突ついたりして、ダンサーの首筋の辺りに色を塗っていた。天井の高いアトリエに、題材にしている「カルミナ・ブラーナ」の

力強い音楽が流れて、電話が鳴っていることにすぐには気がつかなかった。

一体、誰がこんな時間に電話をかけてくるのだろう。六時半、仕事を始めてから僅か三十分外はまだ暗い。始発の電車が裏の緩やかな勾配を登ってきたのは、ついさっきのことだった。

「もしもし、イヤンさん？」

その声を聞いて、僕は驚いた。一呼吸分の空気がうまく肺の中まで入ってこなかったような感じだった。七年ぶりに聞く声なのに、誰からの電話なのかがすぐ分かった。

「陽子ちゃん？ 陽子ちゃんだね、その声。今どこにいる？ トロントから？」

「違う。今、国立の実家よ。こんな朝早くに、ごめんなさいね。でも、どうしても連絡が取りたくて……」

どう切り出しているのか、分からないような短い沈黙があった。

「実は私、二週間前から帰ってきているの。向こうでいろんなことがあって……。ねえ、イヤンさん。近いうち、ちょっと遊びに行っていいいかしら？ どうしても聞いて欲しい話があるから」

何を迷っているのか、耳元ではしばらく微かな息づかいだけが聞こえる。

「誰かに話したくて、ずっと悩んでたけど、やっと気がついたわ。聞いてもらえる相手はイヤンさんしかないの」

彼女は昔と同じ率直で明るい、それでいてどことも不安げな口調で言った。

「ずいぶん謎めいた言い方だね」と僕は答えたが、断る理由はなかった。それどころか、会えるものなら、すぐにでも会いたいと思った。七年前、留学する彼女をカナダまで送って以来、岸村陽子は僕の心にずっと静かに住み続けてきた存在だった。昼過ぎにアトリエで会うことに決めて、僕は静かに受話器を戻した。気分が妙に浮き立っていて、すぐ仕事に戻る気にはなれなかった。

僕はニューヨークのブルックリンで、ポーランド人移民の絵描きの一人息子として生まれた。幼い頃の写真を見ると、いつも細長い絵筆を手に父と並び、大きな画布の下方部分に落書きをしている。どういふわけか、この類の写真しか残っていない。まるで我が家族が持っていた、たった一台のカメラがアトリエに固定されていたかのようなのだ。

高校二年の時、交換留学生として京都で一年を過ごした。

東山の麓にある高校だった。どこへ行くにしてもひどく目立ったことと、やんちゃ、という不本意なあだ名をつけられたことを除けば、その頃の記憶はほとんどない。九月のある雨の日、順子というクラスメートと短いキスを交わしたことが思い出の穏やかな一年だった。ただひとつだけ、当時から画家になろうと思っていた僕にとって重要な出来事があった。日本画

との出会いだ。二条城の華やかな障壁画や、西本願寺の美しい襖絵、建仁寺の鮮やかな屏風、雪舟寺の落ち着いた掛け軸など、僕は東洋の絵画の世界に魅せられて、飽きることなく町を歩き続けた。日本画は高校生の僕の心をときめかせて、未知の世界へと誘った。そこには神秘的な陰影が漂い、美しい色彩の糸が絡み合い、独特な遠近法があった。

アメリカへ帰ると、父にもう少し日本で美術の勉強を続けたいと告げた。彼は首を傾げ、返答に困っていた。僕の東洋への傾倒は、彼にとって明らかに謎の領域に属するものだった。それでも、自由にさせてくれた。高校を卒業すると、僕は今まで描いた作品を東京の美術大学にまとめて送り、推薦入学が認められ、翌年から二度目の日本留学を始めた。

東京の美大生になると、京都にいた頃に負けないくらい熱心に絵を見て回った。くる日もくる日も都内の美術館や画廊に足を運んで、何時間か一人で作品と向き合った。瞑想的な風景、赤い夕日に向かう猫背の法師、乳白色の湯に浸かった美女など、それらは街角の新聞売りや朝帰りの娼婦、埠頭の労働者たち、消火栓の前で水遊びに夢中になっている子供たちなどを題材にした父の作品とはまるで別の世界だった。

僕は学校のアトリエで、美術館で見た絵を思い出しながら模写めいた創作に明け暮れた。日本画を描くことは、ひどく新鮮でスリリングな試みに思えたのだ。

大学が紹介してくれた下宿の大家は、「亀の湯」という銭湯を半世紀前から営んできた優し

い老夫婦だった。「力がありそうだな」とおじいさんに誘われて、そこでユニークなバイトを始めることになった。大学に行く前に風呂場を大量の水で洗い流し、脱衣場を清掃して、薪の準備をした。そして夜遅く、最後の客が帰った後の片付けもした。

子供のいない老夫婦はまるで孫のように扱ってくれた。それが嬉しくて、いつも裸同然の格好で洗い場をびかびかに磨きあげた。バイト代は安かったが、学費は奨学金で賄っていたので、生活するには充分だった。

陽子と知り合ったのは、大学四年生の冬。彼女はまだ十三歳の少女だった。

有名な国際コンクールで優勝し、カナダの名門バレエ学校への留学が決まっていた彼女に、英会話を教えることになった。銭湯のバイトはもちろん続けていたが、卒業後にスケッチブックを手には日本中を回る計画を立てていたので、いくらかまとまったお金が稼げる短期の家庭教師の話に心魅かれた。

陽子は国立の駅から歩いて十分、大きな庭に囲まれた一軒家に両親と三人で住んでいた。派手ではないが、一目で裕福な家庭と分かる門構えだった。少なくとも、ブルックリンの僕のアパートの玄関に比べれば、それはまるで小さな天国への扉に思えた。陽子のお父さんは名の知れた外科医で、大きな私立病院に勤めていた。かつてピアノリストだったというお母さんは、家でピアノの教室を開いていた。

最初に会った時、陽子は机に向かって宿題をしていた。部屋に入ると、彼女は立ち上がって、芝居がかったお辞儀をしながら一へロー、マイ・ネーム・イズ……岸村陽子」と、自分の名前のところだけをまるで早口言葉のように言った。

どう好意的に見ても、生意気の範疇に入る挨拶だった。しかし僕が驚いたのは、そのせいではない。陽子は息が詰まるほど美しかった。彼女の全身から早熟で不思議な存在感が漂っていた。相手を真つ直ぐに見つめる大きな目、瞳の奥に見え隠れする悪戯心と微かな不安の色。頭から首のしなやかな線、ほっそりとした身体と長い脚。十三歳にしては、彼女は背が高かったし、バランスの取れた体形だった。いや、彼女の姿勢が完璧だったといった方が適切かも知れない。

それから半年以上、陽子は僕の教え子だった。

彼女はお世辞にも真面目とはいえない態度で英語の勉強に臨んでいた。これから日常生活の中で毎日日本に、英語を使わなければならないという危機感をまるで抱いていなかった。カナダへの旅立ちとは、彼女にとって現実味の無い、わくわくするだけの出来事に過ぎないようだった。退屈すると、彼女は日本語で銭湯のバイトについて訊ね、僕の話に対していつも「イヤンさんって、やっぱり変な外人ね」という決まり文句を返した。京都へ飛び立った頃の自分を思い出せば、理解できない心境ではなかったが。

僕は無事に大学を卒業し、夏まで中央線で国立の家に通い続けた。

その年の五月に十四歳の誕生日を迎えた陽子は相変わらず明るくはしゃいでいたが、時折、表情に翳りを浮かべるようになった。お母さんの生徒がショパンやバッハの曲を練習するピアノの音が聞こえる中、彼女は急に黙り込んで、肩まで伸びた真つ黒な髪の毛を両手で後ろに束ねて、その姿勢のまましばらく宙の一点をぼんやりと見つめた。「どうしたの？」と聞くと、両腕を今度は前の方へ伸ばして、「だって、つまんないんだもん」と曖昧な返事を返すだけだった。

お母さんに誘われて、何度もバレエのレッスンを見学しに行った。

踊る時の陽子は、僕の知るやや落ち着きのない少女とはまるで別人だった。ダンス・フロアに立つと、いつもの散漫さも茶目っ気もどこかへ消えて、彼女は冴えた集中力を発揮しながら、次々と正確で優雅な動きを披露した。あまりにも美しく、思いがけないその変貌に、僕はいつも胸を打たれた。

小さな教室に通ううち、僕は練習の様子をスケッチブックに描くようになった。バレエの流動的な動きには、確かに魅せられるものがあつたが、それでも暇潰しに近い、軽い遊びに過ぎなかつた。後に、日本画の世界を離れ、バレエという新しいテーマに本格的に取り組むようになろうとは、その時は夢にも思わなかつた。

「イヤンさん、今度の日曜日お暇でしたら、うちで夕食をいかがですか」と陽子のお母さんに誘われたのは、出発まであと一ヶ月を切った七月末のある午後だった。その招待を、僕は軽い気持ちで受けた。ところが、四人で食卓を囲んでいると、陽子のお父さんが思いも寄らぬ話を切り出した。娘を一人でカナダまで行かせるのは、どう考えても心配だ。君に同行してもらえないか、というのだった。

「多くの患者さんを抱えているので、自分が行くのは到底無理だ。それに、この人は外国に行くと、添乗員に手を引いてもらわないと何もできないおばさんだ……」

陽子のお母さんはやや不服そうな表情を浮かべたが、彼はそれを無視して続けた。

「君にお願いできれば、一番安心だ。ついでに、帰省するというのはどうだろう。旅費はもちろん、お礼もちゃんとさせて頂きたい。考えてもらえないだろうか」

物事を、思うように効率よく処理することに慣れた人の口調だったが、確かに悪い話ではなかった。僕はビールの残りを飲み干して、陽子を見た。

「どう、陽子ちゃん？ この変なイヤンさんと一緒にカナダに行ってみるか」

「シャンペン、頂けないかしら？」

二本目の映画が上映されている途中だった。機内は静かな低音の薄闇の世界と化しており、

僕はぐっすりと眠っていた。だから、水晶のように透き通った陽子の声を、最初は夢心地で耳にしたのだった。

「シャンペン、頂けないかしら？」

清らかな水滴が冷たい石の水柱を伝い、鍾乳洞の地面に滴り落ちるように、彼女の声は再び頭の中でこだました。僕は目をこすりながら、また始まったと、一人微笑んだ。

出発の前日、国立で送別会を兼ねたガーデン・パーティーが催された。そこには陽子の中学校の友達や、バレエ学校の先生と生徒、それに患者とも病院のスタッフとも見分けがつかないお父さんの知人や、お母さんのピアノの生徒とその父母までが招かれていた。盛大というか、いささか大袈裟な集まりだった。皆に囲まれて、一人で突っ立っている主役の陽子は、どこことなく可憐で無防備に見えた。

陽子の留学の無事と今後の活躍を祈って、皆はシャンペンで乾杯をした。陽子も特別に一杯飲ませてもらった。まだ十四歳だが、何しろ彼女の送別会だった。ところがこのシャンペンの洗礼は、お父さんが注いだ最初の一杯で終わらなかった。陽子は庭の片隅に隠れて、こっそりと二杯もお代わりした。その光景をたまたま目にした僕は、賑やかな夏の芝生を横切り、「アルコールはバレリーナの体に毒でしょう」とからかうような、叱るような口調で言った。

「だって、美味しいんだもん、これ」と彼女は僕の顔色を窺いながら言った。「ねえ、お父さ

んには絶対に内緒にしてね」

「呆れたお嬢さんだね。まあ目をつぶってあげよう。でも、このくらいにしておいてよ」共犯者めいたウインクを送ってみせると、彼女はくすくす笑った。

シカゴ経由でトロントに向かう飛行機はさほど混んではいなかった。僕は窓側に、陽子は通路側に座っていた。その通路には、陽子の座席の肘掛けに手を載せて、困り果てた表情をした若いスチュワードがしゃがみ込んでいた。北太平洋の上空を高度一万メートルで通過する飛行機の中で、これほど若い女の子からシャンペンの注文を受けるのはきつと初めてだったのだろう。二人は押し黙って見つめ合っていた。陽子は大きな瞳で相手の顔を覗き込み、若いスチュワードは益々困惑の色を深めた。いくら丁寧なサービスを目指そうとも、「はい、お待ちせ致しました」と職業的な笑みを浮かべ、十四歳の少女にシャンペンを出すわけにはいかない。どちら譲らず、妥協の姿勢も見せず、僕は見るに見かねて、助け船を出した。

「シャンペンは僕がもらいましょう。このお嬢様にはオレンジ・ジュースを持ってきて下さい」

陽子は僕を怪訝そうな目で見た。それは、一度もスパイ活動をしたことがないと主張する元KGB職員を見るような目つきだった。

若いスチュワードが戻った時、トレイの上にはオレンジ・ジュースの入った白い紙コップと、

ボメリの小瓶とグラス一つが載っていた。

「全部ここに置いてください。シャンペン注がなくても結構です」と僕は言った。

そして前方のスクリーンから跳ね返る色とりどりの光線を浴びながら、小瓶の栓を丁寧に抜いて、細かい泡が躍る黄金の液体をグラス半分まで注ぎ、紙コップのオレンジ・ジュースで割った。陽子はその作業をじっと見守っていた。

「はい、出来上がり。これはミモザという名のカクテルだ。世界で一番贅沢なオレンジ・ジュースと言われている」

「なんだか、あまりシャンペンには見えないね」陽子はグラスを受け取り、眉間に深い皺を寄せながら、用心深そうに一口飲んだ。

「でも、美味しい」大きな笑みを浮かべて、彼女は頭を下げた。「イヤンさん、どうもありがとうね」

僕はシャンペンの残りをオレンジ・ジュースの残りに注ぎ、小さな紙コップを目の高さまであげた。「Cheers!」

映写機から伸びる一筋の淡い光をぼんやりと眺めて、僕はミモザをゆっくりと啜った。陽子の大きな瞳の中に光が躍り、それにつられて、僕も映画に目を向けた。大きな薄茶色の買物袋を抱えた背の高い男と、もう一人の刑事風の男が、走り出したばかりの長い貨物列車を必死

で迫っている。見覚えのある場面^{シチュエーション}だったが、映画のタイトルがどうしても思い出せない。

「ねえ、イヤンさん」陽子は小さな声で沈黙を破った。

「私ね、この留学の話が決まった時、すごく嬉しかったの。だって、これからずっと踊りの道を歩んでいけるでしょう。それに、トロントのバレエ学校を無事に卒業できたら、きつと一流のバレリーナになれるような気がするの……」

空の紙コップを手に持ったまま、僕は話の続きを待った。

「でもね、私さつき、急に不安になった。心細くなって、いろんなことが恐くなって、ここから逃げ出したくなったの」

「それでシャンプンを頼んだ？」

彼女は力なく頷いた。

「大丈夫さ。カナダはきつと楽しいよ。留学生生活も絶対にうまく行くよ。心配することは何もない。僕だって、つい最近まで留学生をやっていただろう。でも見ての通り、大きな後遺症もなく、ごく普通に生きているだろう。こんなにも正常でまともな人間になって……」

「陽子は小さく笑って、相変わらず変なことばかり言うのね、と僕の顔を長い間じっと見つめていたが、やがてぼつりと呟いた。「ねえ、ミモザをもう一杯作ってくれないかしら？」

「やれやれ、僕は溜め息をついた。しかし陽子を相手に議論するだけ時間の無駄だろうと思